

氏名（本籍）	森川 和珠（日本）			
学位の種類	博士（社会福祉学）			
学位番号	甲第85号			
学位授与の日付	2022年3月19日			
学位授与の要件	学位規則第5条第1項の規定該当			
学位論文題目	スピリチュアルケアに取り組む支援者の二次的ペインとその実践的サポートに関する研究			
研究審査委員	主査	平野 隆之	日本福祉大学	特別任用教授
	副査	田中 千枝子	日本福祉大学	教授
	〃	大谷 京子	日本福祉大学	教授
	学外審査委員	木原 活信	同志社大学	教授

論文内容の要旨

「スピリチュアルケアに取り組む支援者の二次的ペインとその実践的サポートに関する研究」は、序章と終章を含め、全7章で構成されている。総ページ数171ページ、引用・参考文献は91である。

本論文は、スピリチュアルケアに関する先行研究を踏まえ、学術的な系譜のなかに筆者の独自概念であるスピリチュアルケアに取り組む支援者の「二次的ペイン」を位置づけ、その実態と課題を量的・質的調査を通して明らかにし、その取り組みを実践面でサポートするツールの開発にまで展開したものである。

1) 研究の目的と方法

1) 研究の目的

本研究の目的は、スピリチュアルケアに関する学術的な系譜を踏まえながら、スピリチュアルケアに取り組む支援者の二次的ペインについて、その負担感と内実を明らかにし、かかる支援者を実践的にサポートする方法を開発することにあると設定されている。

本研究におけるスピリチュアルケアの定義は、「生きることの本質と向き合う苦しみであるスピリチュアルペインと、それを含む全人的苦痛を抱える人へのケア」とされている。他方、スピリチュアリティは、意味と関係性に支えられた「人を生かすつながり」とする。それらを踏まえて、どのつながりがその人を生かすのか、どのつながりを強く感じるかはその人次第であり正解はないが、その人がもつスピリチュアリティ、その人を生かすつながりがあることを信じ、人がそれに気づきを見出す過程を支えていくことがスピリチュアルケアのいとなみであると捉えている。また、スピリチュアルケアに取り組む支援者が、ケア対象者との関わりを通して引き受ける「痛み」を「二次的ペイン」として設定している。

2) 調査研究の方法

本研究では調査対象を一貫して上智大学グリーンケア研究所の修了生としている。日本において同研究所がスピリチュアルケアの人材養成機関として中心的役割を担い、そのプログラム下において修了生が一律の教育を受けていることを重視したと、その理由を述べている（第2章）。なお、

調査研究の成果の実践面・養成面におけるフィードバック先としても、同研究所が想定されている。

3つの調査が段階的に実施されている。調査1では、上智大学グリーンケア研究所の修了生100名を対象に、スピリチュアルケアの実践の状況と、ケア対象者のスピリチュアルペインに触れて支援者が引き受ける負担感について、選択式・自由記述式の設問を郵送調査によって実施している。回収率は92.0%であった。

調査2では、上智大学グリーンケア研究所の修了生で、かつ日本スピリチュアルケア学会認定の専門スピリチュアルケア師資格を有し、福祉領域での1年以上の実践経験を持つもの5名を対象に、インタビュー調査を実施している。スピリチュアリティの影響や役割に注目しながら、支援者の成長と二次的ペインの内実という二軸を分析テーマとして設定し、M-GTAを用いて分析を行っている。

調査3は、実際に支援者をサポートするツールの開発を進める過程に関する参与観察調査となる。森川氏が代表を務める「NPO法人いのちのケアネットワーク」のもとに、参加型の研究組織「ケアのいとなみ研究会」を組織し、そこを母体として「いまここシート」(サポートツール)の開発に取り組んだ過程とその成果を対象としている。2019年10月から2020年1月の期間の取り組みである。

2) 論文の構成

本論文は序章と終章を含め、全7章からなる。以下の章構成をとっている。

- 序章 本研究の目的と背景、研究の枠組みと論文の構成
- 第1章 スピリチュアルケアをめぐる研究の動向
- 第2章 二次的ペインと日本におけるスピリチュアルケアの人材養成
- 第3章 スピリチュアルケアに取り組む支援者の負担感
- 第4章 二次的ペインの内実—スピリチュアルケアに取り組む支援者の成長過程から
- 第5章 セルフケアとピアサポートの実践的応用
- 終章 研究の成果、課題と展望

序章：研究の背景としての問題意識、つまりスピリチュアルケアに取り組む支援者には、ケア対象者が抱える実存的な苦悩(スピリチュアルペイン)に触れながら、その重みで倒れてしまわないだけの力が必要であるとの認識から本研究は出発する。そして、二次的ペインの内実を明らかにすることで、実存的な深さでの関わりをともなう支援とそれを担う支援者への新たな視座を拓き、支援者へのサポート可能なツール作成に向かう、という研究の論理的な展開が示されている。その展開に必要な鍵概念である「スピリチュアリティ」と「スピリチュアルペイン」の概念整理が行われている。

第1章：スピリチュアルケアをめぐる研究動向について、主に、医療的なスピリチュアルケアとスピリチュアリティに配慮したソーシャルワーク(SSSW)という二つの流れを整理し、ソーシャルワークの文脈から語りなおすことを試みている。そのことにより、これまで社会福祉において「福祉エートス」として潜在化してきたスピリチュアリティの意味を改めて示し、スピリチュアルペインとスピリチュアリティの両方の視点をもった支援について、支援者支援にも応用するかたちで提示している。

第2章：「二次的ペイン」の概念化について、その周辺概念との関係から整理し考察している。第1節では共感疲労と二次的外傷ストレス、ペインとサファリング、関わりと揺らぎ、悲しみの呼応といのち、というキーワードを整理しながら、二次的ペインの概念とケアにおける関係性を考察の対象としている。第2節では、日本スピリチュアルケア学会におけるスピリチュアルケア専門職養成プログラムと、上智大学グリーンケア研究所における実際の養成について解説している。以下の調査対象となる人材の背景を明確にする役割を持つ。

第3章：質問紙調査によりスピリチュアルケアに取り組む支援者の負担感を明らかにし、二次的ペインの実態に接近している。調査結果からは、現在のスピリチュアルケアの実践状況とその多様性が明らかになるとともに、スピリチュアルケアに取り組む支援者の多くがケア対象者との関わりによって生じる痛みを感じながらも実践の継続を望んでいることが明らかにしている。

第4章：第3章での結果を踏まえ、インタビュー調査を通して二次的ペインの内実を支援者の成長過程を明らかにしている。データはM-GTAに準ずるかたちで分析し、分析テーマは「スピリチュアルケアに取り組む支援者における二次的ペインの内実」と「スピリチュアルケアに取り組む支援者が支援者として成長していく過程」の2軸を設定し、結果をそれぞれストーリーラインと結果図を示して説明している。支援者は二次的ペインを重い負担感をもたらすものからケアにとって必要で大切なものへと、その意味を見出している。支援者は、仲間と支え合いながら自己と向き合い、自身が抱える痛みを見つめ、スピリチュアルケアを体感することで自身の生を支えるつながりに気づき、スピリチュアリティに目覚めていくこと、支援者にとっては二次的ペインの痛みより、ケア対象者と関われないことのほうにつらさを感じることに、そうした歩みを継続的にサポートすることの必要性が示されている。

第5章：スピリチュアルケアに取り組む支援者を主体とした「参加型研究会プロジェクト」を通して、実際に支援者をサポートするツール「いまここシート」を開発する。開発のプロセスでは、研究作業を通して、支援者であるメンバー自身がスピリチュアリティの意味や役割を学術的にも実践的にも確認し、具体的なサポートツールのなかに落とし込んでいく作業が示されている。合計4回の研究会にて試作版が作成され、それをもとに計8回の試行会を実施し、5回目の研究会において「いまここシート」と「いまここシート」の使い方を完成させている。

終章：第5章までの考察を受け、本研究の成果、課題と展望を述べられている。まず、本研究の学術的意義として2点の指摘がある。ひとつは、これまで医療モデル中心だったスピリチュアルケアについて、ソーシャルワークとしてのスピリチュアルケアの歴史的意味をSSSWから語りなおすことで、その意義と役割を再確認したこと、もうひとつは、「二次的ペイン」という概念を提案しその内実を明らかにしたこと、である。実践面・人材育成面における意義においては、スピリチュアルケアの多様性を示したことであり、スピリチュアルケアに取り組む支援者をサポートするツールを開発したことが述べられている。支援者をサポートするツールについては、すでに上智大学グリーンケア研究所にフィードバックされ、支援者の継続的・持続的なケアへの貢献に意義深いものであるとの反応が寄せられていることが、付記されている。

論文審査結果の要旨

1. 審査経過

2021年10月14日の福祉社会開発研究科社会福祉学専攻会議において、平野隆之、田中千枝

子、大谷京子の3名が審査委員に選出された。同年12月9日の同専攻会議において第1次審査の合格を決定した。12月11日の博士論文学位請求予定論の公開発表会を経て、2022年1月13日の同専攻会議において、博士学位授与審査の本審査の受理を確認し審査委員会が設置された。これまでの平野、田中、大谷の3名の審査委員が継続するとともに、学外審査委員を木原活信同志社大学教授に決定した。同年2月4日に学位授与審査委員会による論文審査と口述諮問が実施された。終了後に審査委員会は、学外審査委員による結論を踏まえて、合格との判断を行った。なお、学外審査委員からは、2022年1月31日付けの審査報告書において「合格」の結論を得ている。

2. 論文の評価

1) 評価点

第1の評価点は、①スピリチュアルケアをめぐる先行研究を踏まえた学術的系譜の整理と検討、②スピリチュアルケアに取り組む支援者の成長と実践のありようの分析、③スピリチュアルケアに取り組む支援者のためのサポートツールの開発、といったスピリチュアルケアに関する総合的で独創性の高い研究をなし得たことである。学外審査委員が「一つの完成された論文」との評価は、この総合性を表現していると推測できる。①～③の要素のどれをより高く評価するかで審査委員間での差がみられるものの、以下では、論文構成や論理的な展開の順序とは異なるが、②、①、③の順に個々の内容について評価しておく。

第2の評価点は、日本のスピリチュアルケア研究においてこれまで試みられていなかった宗教者でも医療者でもない「スピリチュアルケアに取り組む支援者」のケア実践に関する質的・量的な調査がなされたこと、そしてスピリチュアルケアに取り組む支援者の成長と実践のありようを明らかにしたことである。支援者へのインタビュー調査を分析するにあたり「二次的ペインの内実」と「支援者の成長過程」という二つのテーマを設定し、それぞれに分析を展開している。スピリチュアリティおよびスピリチュアルケアの特性を示しながらも抽象度の高い言葉の扱いに苦慮しつつも、質的な調査結果の分析を通して、支援者らが普段体験しているスピリチュアルケアの実感により近づくことができている。なお、学外審査委員は、「支援者自身の成長とスピリチュアリティの涵養によって、ネガティブなものからポジティブなものへと意味を変容させていることを明らかにした点は高く評価できる」としている。

第3の評価点は、上記のスピリチュアルケアに取り組む支援者の実態に接近できた背景として、ていねいな先行研究のレビューから「スピリチュアルケアに関する学術的系譜を十分に踏まえ」（学外審査委員）たうえて、スピリチュアルケアに取り組む「二次的ペイン」という独自の概念を提示したことである。スピリチュアルケアでは、支援者がケア対象者のスピリチュアルペインという実存的な重みのあるものに接近するが、支援者がそれに触れることで引き受ける「痛み」を示す呼称はこれまでなかったといえる。

第4の評価点は、スピリチュアルケアに取り組む支援者のためのサポートツールを、支援者らとともに開発し実用化したことである。本研究では、支援者自身の「いまここ」を見つめ自己理解を深めることでスピリチュアリティへの気づきを促すという、これまでにないアプローチでのサポートツールを開発したとあってよい。開発にあたっては、スピリチュアルケアに取り組む支援者自身が研究会を組織し、主体となって実践的かつ研究的なアプローチによってその知見を集積させるという方法上にも独自性を見出すことができる。

2) 課題点

課題についても以下の3点について触れておく。第1の課題は、調査に関するものである。本研究では二次的ペインに関しての量的調査と質的調査が実施されているが、その分析において、いくつかの課題が見出される。第1調査では質問紙において表現の曖昧さや分かりにくさがあり、分析においてはほぼ単純集計にとどまり多様な解析の展開ができていない点である。第2調査では再インタビューの形で調査が補強されたものの、二次的ペインの内実に接近するための「意味」の抽出において、「痛み」がどう昇華されているのかを追うことが優先される傾向にある。また、調査対象の制約から、「普遍化した調査結果として議論するには困難が伴う」（学外審査委員）との指摘もある。

第2の課題は、理論枠組みに関するもので、スピリチュアルケアと宗教との関係性における十分な議論が展開されていない点である（学外審査委員）。なお、この点については、最終審査のなかで、森川氏からは、社会福祉における宗教とスピリチュアリティについて、それが一定の拒否反応とともにあることを考慮して、簡単にその経緯と概要を述べるに留まったことが説明されている。宗教とスピリチュアリティへの言及は社会福祉にとってもスピリチュアルケアにとっても、その本質を問うものであり、より深い考察を必要とするものであることから、引き続き論考を重ねていきたいことが表明されている。

第3は、支援ツールの開発の過程の記述について、客観的で考察的な記述に欠けていることである。この点については、学外審査委員からも、「第三者による厳密な検証が求められる」との指摘がある。また、支援ツールが何を支えているのかが明確化されることが今後の課題であるとの指摘も審査委員からなされている。後者の点については、口頭試問の場において、サポートツールの開発までを考察の範囲としたが、このツールの実際的な展開と活用に関して、継続的な調査を行っていく必要があるとの認識が森川氏から示された。

3. 最終試験（学力の確認）の結果

以上のような課題について、森川氏に質問したところ、すでに課題点のところでも述べたように多くの点で課題を共有しており、その改善にむけての研究を継続することが真摯に述べられた。審査委員からは、森川氏の研究継続への期待とともに、博士論文の出版への期待が述べられた。その際、調査結果の分析と考察において補強する必要性について付け加えられた。

本審査委員会では、森川氏の英語力の審査を行った。本人から提出されていた本論文の英語要旨の中からランダムにパラグラフをとりあげ、読み上げと日本語訳を指示したところ、適切な返答がなされたことを確認した。

学外審査委員の木原活信同志社大学教授からの審査報告書において、「合格」の判定を得ていることを記しておく。なお、その一部は、評価点や課題点の関連部分で引用しておいた。

4. 結論

本審査委員会は、学位申請者（森川 和珠）は、日本福祉大学学位規則第12条により、博士学位（社会福祉学）を受けるにふさわしいものと判断し、合格と判定する。

以上